

論文

井原西鶴の収支計算 「万の文反古」の金銭的分析

宮内輝武

— 1 —

「万の文反古」の成立 井原西鶴は元禄6年（1693）8月大阪で52才の生涯を終わるが、没後3年たって元禄9年（1696）に刊行されたのが、書簡体の小説でユニークな内容の「万の文反古」である。その成立の時期や、果して全編が西鶴の作品であるか否かについて多少問題が残っているようだが、通説として西鶴でないと描けない斬新な内容であるとして、西鶴の作品として考えて良いものとされている。

作家の正宗白鳥は『「万の文反古」は、西鶴自身が知人に与えた手紙ではなく、当時のいろいろな人間に頼まれて代筆した手紙みたいなものであるが、書翰としては、古今無類の名品であろう』（注-1）といている。神保五弥教授（早稲田大学）は『序文で西鶴は、手紙にはふだん隠されている人の心がはっきりと見られるといい、しかもその人の心とは、他人に知られて恥ずかしいものだといっている。個人的な手紙の持つ非公開性を前提とすることで、人が手紙を通してしばしば懺悔し、告白し、希求するという事実を明確に認識したうえでの発言である。』（注-2）と述べられていることからみても、この作品の重みが感じられる。

この小論では、この作品を文学的に観察するのではなく、当時の作家としては図抜けて金銭的な感覚の鋭い西鶴の経済的記述を分析して、元禄前後の経済生活を考察しようとするものである。

考察の内容 ここで企図した内容は、「万の文反古」の順を追って、金銭の額で表現されている内容を抽出して、当時の経済状態を考えながら論旨を進めたい。なお、現代の円価額との換算は拙稿「飲食物の収支計算」の換算率による。(注-3)

さらに、引用する「万の文反古」は原文・現代語訳は小学館版「日本古典文学全集 井原西鶴集(3)」により、さらに現代語訳は筑摩書房版「古典日本文学全集23 井原西鶴(下)」による。

- 注 1. 正宗白鳥 著「西鶴について」古典日本文学全集22 井原西鶴集(上) 筑摩書房版 昭和34年 p390
2. 神保五弥 著「万の文反古」日本古典文学全集 井原西鶴集(三) 小学館版 1989・4 p31
3. 宮内輝武 稿「飲食物の収支計算」白鷗女子短大論集14-2 平成2年 白鷗女子短期大学版 p64-65

— 2 —

世帯の大事は正月仕舞

苦しい商人の懐具合 商売のため旅に出た商人が思うような成果も上がらず、正月も帰宅することができず、息子に暮れの支払いを乗り切る方法を指示している手紙である。商人の「やりくり算段」の内幕が書かれているのは興味深い。旅先の播州で土地を買い入れて、商売は廃業し細々と暮らすことまで考えての指示でもあった。この手紙の中からは、

1. 苦しい商人の財政状態
2. 当時の店賃
3. 医者にたいする薬礼

の3項目を取り上げてみた。なお、この手紙に出てくる金銭表記の内容と、その貨幣額の現在円貨への換算額については巻末の図表-1を参照されたい。

商人の財政状態 三井高房の「町人考見録」の序文に『只商家耳後は手

代にまかせ、其身は代の続くにしたがひ、家業をわするゝを以て、終に家をうしなう』(注-4)とあるように、分限・長者といわれる商人でも、その内証は苦しく、この手紙に書かれているように倒産寸前の商家も少なくなかった。その収支状態は図表-1(A)のとおりであるが、最終的には多額の負債が残り、営業の継続が困難な状態であることが看取することができる。

図表-1(A) 収支状態

No	項 目	金 額	換 算 額
7	現在までの収益額	銀 439貫	502,325,750 円
8	借金の利息払総額	銀 314貫 600匁	359,980,900 円
9	貸倒金	銀 37貫	42,337,250 円
10	米の売買損	銀 85貫	97,261,250 円
11	親譲りの借金	銀 19貫	21,740,750 円
	差 引	銀 -16貫	-18,308,000 円

(注) Noは巻末の一覧表の通し番号である。

店賃について 店賃について4ヵ月分のうち、3ヵ月分の銀180匁を支払えと指示しているが、この店賃について考えてみたい。

店賃と地代については現在と同様、値上がりすることが多く、特に火災の発生が多かった江戸や大坂では、その傾向が甚だしいために少し時代が下るが、天保13年(1842)には幕府は市中地代店賃引下げ方を町奉行から申し渡すように命じている。この通達によると公定の店賃の決定方法としては普請代金が6ヵ年で償却できる額を店賃とするように定めている。(注-5)

図表-1(B)に準拠すると、この手紙による1ヵ月の家賃銀60匁(現貨換算 ¥69,640)で推定すると、建坪36坪の表店で商売をしていたことが推定できる。

図表－１（Ｂ） １坪当り店賃一覧 天保13年（1842）

地域別	建物種別	1坪当り 1ヵ月家賃	現金換算
表 店	2階瓦葺	銀 2.083 匁	¥ 1,920
	平屋瓦葺	1.458	1,344
	2階柿葺	1.354	1,248
裏 店	2階瓦葺	銀 1.563 匁	¥ 1,441
	平屋瓦葺	1.146	1,056
	平屋柿葺	0.938	864

大熊喜邦著「江戸建築叢話」中公文庫 昭和58 中央公論社 p136-137
 現貨換算は天保年間平均の銀 1 匁 ¥922 による

江戸時代の医療費 医者への薬礼として銭 500 文（¥8,500）の支払いを指示している。この時代の医療費の実態はどのようになっていたのだろうか。「万の文反古」の巻5「広き江戸にて才覚男」の条にも、通常金 1 分（¥17,164）ほどの薬礼を後々のことを考えて金 5 両（¥343,275）支払った事例が出ているが、これは特例である。

図表－１（Ｃ） 安政年間（1845－1860）の医療費（注－6）

項 目	代 価	現貨換算
診察料 1日	金 0.5 両	¥ 25,206
薬代 3日分	0.25	12,603
往診代 初診時	1/3	16,804
2回目から	1/4	12,603
手術料 切傷 1寸につき	1/4	12,603
出産手術	1/2	25,206
乳癌手術	2.5	126,032

- 注 4. 三井高房著「町人考見録」日本思想大系59 中村幸彦編 近世町人思想 1980 岩波書店 p177
 5. 大熊喜邦著「江戸建築叢話」中公文庫 昭和58 中央公論社 p131-143
 6. 稲垣史生著「考証江戸奇伝」河出文庫 p208-218

栄花の引込所

若主人の放蕩 毎年の利益が1,000両（¥68,655,000）も計上できる大店も若旦那の放蕩で奇うくなり、いままで安定した生活が送れた34人もの従業員も不安な毎日を送るようになったのを憂いた忠実な手代たちが若旦那を隠居させて店を立て直そうと親戚の法師に援助をもとめた手紙で、金持ちの家の息子の浪費ぶりや、隠居後の生活保証の額など、大商人の生活を知ることができる資料である。ここでは、

1. 若旦那の浪費額
2. 隠居後の生活費

を、分析してみよう。元禄期ごろからは、それまで積極的に商売を拡大した商人達は大きな資産を築き上げたが、それ以降は守りの態勢に入り、井原西鶴は日本永代蔵で、早起、家業、夜業、儉約、健康と商人の基本的な心構えを述べているが、現実には、浪費や放蕩をつくす2代目、3代目が多かったのではなかろうか。（注-7）

浪費額の内容 大きな利益をあげている大店でも、浪費された放蕩の資金総額が9,000両（¥617,895,000）にもなれば、当然破産に瀕するのは当然である。その内容は図表-2（A）の通りである。

隠居後の生活費 このような浪費家の若旦那の隠居後の生活に対して手代達は、次のような条件を示している。（注-8）

1. 希望する場所へ広い座敷を新築する。
2. 米・油・味噌・塩・薪の提供。
3. 四季折々の小袖の提供。
4. 年間の小遣い 240両（¥16,477,200）
5. 京都から給金百両（¥6,865,500）の妾を2人抱える。

6. 腰元・仲居・茶の間女・お裁縫女・下女 2 人・小姓 2 人

小坊主・按摩・歌うたい・料理人・駕籠かき 2 人・草履とり 2 人

手代 以上 22 名

これを見ても、暮しの贅沢さがよくわかる。

図表－2（A） 浪費額の内容

No	項 目	金 額	現 貨 換 算
14	内証の借金	金 4,500 両	¥308,947,500
15	金策のための高値買・安売	1,400	96,117,000
16	売掛金の遣い込み	2,000	137,310,000
18	放蕩資金の総額	9,000	617,895,000

注 7. 井原西鶴著「日本永代蔵」日本古典文学大系 昭和35 岩波書店 p870

8. 井原西鶴著「万の文反古」日本古典文学全集 1989 小学館 p277

— 4 —

あけて驚く書置箱

相続の騒動 存命中は順調に営業されていたように思われた商家も、当主が亡くなってみると、いろいろな問題があることが表面化し、今までは平和に暮らしていた家族の本音も出てくるという人生の機微をこの手紙は描写している。ここでは、

1. 相続取り分のあり方。
2. 現金は殆どなくすべて大名貸の証文。
3. 家質のこと。
4. 後家の振舞い。

の、4 点を分析してみよう。

相続の方法と取分 鴻池家が正徳 6 年（1716）に定められた家訓の一部に次のような事が規定されている。

『善右衛門繁昌に相続，子供大勢在之候共，何分にも本家慥か成様に仕，或は身代十のもの八つ・九つ迄は本家相続人江譲り，相残る壱二歩にて次男より以下相続致し候様に相心得可被申候事』（注-9）とあり，財産の分割には，本家を優先したことがわかる。この手紙の場合は，図表-3（A）でわかるように，長男が金銭の約半分を相続し，残りを兄弟や次男に分配されるように遺言されている。ただし，遺族たちが調査したところ現金が殆どなく大名貸の証文しか残っていない，空証文の相続ということになった。

図表-3（A） 遺産配分の内容

No	受 取 人	金 額	現 貨 換 算	%	備 考
44	総領甚太郎分	銀 350 貫	¥400,487,500	53	外に住宅など
45	次男甚次郎分	200	228,850,000	30	別の家屋敷
46	姉妙三分	30	34,327,500	5	和泉の新田付
47	弟甚太兵衛分	50	57,212,500	8	
48	甚太夫分	20	22,885,000	3	
49	手代九郎兵衛分	5	5,721,250	1	
		655	749,483,750	100	

（注）現実には現金はなく大名貸の証文のみ

大名貸のこと 商業取引によって資産が蓄積されると，多くの商人は金融取引により，蓄積された資本をさらに増大しようと努力するのは常道であった。例えば，酒造業等で産をなした徳川期初期の特権商人たちは，質商，両替商，金貸商の分野に進出してさらに巨大な豪商に成長した者も少なくない。しかし，担保のない金融の危険性が次第に顕著になったため，権力を持ち，「米」という換金物資を多量に保有する大名に的をしぼって，金融をおこなう「大名貸」が金融資本の主目標となってきた。

しかし，三井高房の「町人考見録」の両替屋善四郎についての記述のように長州毛利家への銀壺万三千貫（延宝年間のことと考えて換算すると次のよ

うな約163億円という巨額な金額となる。)の貸付金が滞り、結局倒産したことが書かれている。(注-10)

この手紙の約7億5千万円の大名への貸付金も、その回収は不可能に近いものであったに違いない。

家質のこと この手紙の中に、

『我々が親道斎申置かれしは「町人家質の外、金銀借（カシ）申す事無用。その上有銀三ヶ一出し申すべし。皆々は慥かなる事にもかさぬ物」と、くれぐれいひわたされしに、我が物時の用に立たざる事にて、道斎の御事おもひ出し候。』(注-11)

とあり、家質が金融上の最も確実な担保とされていたことがわかる。当時の貸付利息は最高年利率で元文年間（1736－1741）で20％、その後15％、12％と決められていたが、家質の場合は担保が確実ということで年利率4.2％から4.8％ほどであった。(注-12)

図表－3（B） 江戸時代の金銀貸借の利息と罰則

年	代	年 利 率	備 考
1736.8マデ		20%	
1736.9カラ		15%	
1842.9カラ		12%	
罰則	寛政年間（1789-1801）	年利率	75% 遠島 60% 追放 30% 所払又は百日手錠

(注) 石井良助著「新編江戸時代漫筆下」朝日選書 1979 朝日新聞社 p213

後家の振舞い この手紙には強かな後家の振舞いが書かれている。遺言状には後家への配分についても何も書かれていなかったが、総領の甚太郎は遺言にはないが屋敷内に隠居所をつくり寺参りの費用として銀20貫（現貨換

算 ¥22,885,000)を提供すると申し入れたが後家は断わるので、手元にあった銀5貫(¥5,721,250)を渡して実家に帰した。その後になって、手もとに現銀が全くないのに気が付き、後家の振舞いに腹を立てた。さらに、後家の残した長持ちの中に銭800貫文(¥13,723,200)があったが、さすがに引き取りにはこなかった。元禄女性の強かさがにじみでている挿話である。

- 注 9. 作道洋太郎著「江戸時代の上方町人」教育社歴史新書 1978 教育社 p88
10. 三井高房著「町人考見録」日本思想体系 中村幸彦編 近世町人思想 1980 岩波書店 p183-184
11. 井原西鶴著「万の文反古」日本古典文学全集 暉峻康隆他校注 井原西鶴集(3) 1989 小学館 p322
12. 石井良助著「新編江戸時代漫筆 下」朝日選書 1979 朝日新聞社 p188-197

— 5 —

南部の人が見たも真言

京の興行と料理店 前半は京都の近況などを知らせている文面だが、後半には、まるで近松門左衛門が描くような悲劇を書き送っている。ここでは前半にのみ焦点を当てて金銭的な分析を試みたい。

内容としては、

1. 四条河原の見世物の事。
2. 芝居について。
3. 東福寺のほとりの料理店のこと。

が、主なものである。

見世物の事 喜多川守貞の「守貞漫稿」によると、見世物について次のように書かれている。

「京師ハ四条河原ヲ専ラトシ、大坂ハ難波新地、江戸は両国橋東西、浅草寺奥山を専ラトスル。木偶或ハ紙細工・糸細工・硝子細工・竹細工等の類、

時々珍トスル物等ヲ錢ヲ募ッテ見世ル。又足芸・力持・輕業・コマ廻シ等種々無際限シ」(注-13)とあり、入場料としては18文(嘉永ごろとして現貨換算¥252)位で安価なものであった。さらに、外国産の珍しい動物も見世物の対象となり、南方産の極楽鳥や、虎、オウム、ラシャメン(羊に絵の具を塗った怪しいもの)、火食鳥、アザラシ、孔雀、ラクダ、豹、ロバ、象等が公開されていた。(注-14)この手紙中の良竜(あまりょう・南方産のキノボリトカゲの類とされている)も金50両(¥3,432,750)だとしても、見世物として採算の取れる珍しい動物であったらしい。また、角の生えている猿や、足の四、五本ある唐鳥などの買付けも依頼している。

芝居について このころの芝居については、金のかかる芝居茶屋を通して、棧敷で見物する客が少なくなり、芝居茶屋の営業が困難になったことを伝えている。しかし、芝居に二千両(¥137,310,000)まで出資しようという金持ちがあり、契約も済みましたので成功するだろうと伝えている。

安価な料理店 「京もしだいにせちがしこく・・・」(注-15)になって当座飯をだす簡易な料理店が東福寺の近くに出店し、銀1分(¥114)から2匁(¥2288)で料理を提供する。そうして銀5分(¥570)で「御汁干葉に蛤のぬき実、料理鱸子は見合せ、煮物生貝ぜんまい、焼物干鰯引きて、かう物」(注-16)の料理が出されている。このような安価な料理店の続出の理由として滝沢馬琴が京の人の狡なる気質によるとして「京にて客ありて振舞いするには、(中略)酒店え伴ひ行。是、別段に客をもてなすの儀にあらず。家にて調理すれば、万事に費あり。その上、やゝもすれば器物をうち破るの愁ひあり。故にかくのごとくす。」というのも誤りではなかろう。(注-17)

- 注 13. 喜多川守貞著「守貞漫稿」朝倉治彦編 昭和63年 東京堂出版 p464
14. 興津 要著「江戸娯楽誌」 1983 作品社 p58-63
15. 井原西鶴著「万の文反古」日本古典文学全集 井原西鶴集(3) 1989 小学館 p335

16. 同上 p335

17. 守屋 毅著「京の町人」教育社歴史新書 1980 教育社 p210
滝沢馬琴の「羈旅漫録」の一節

— 6 —

その他の項目

商人の振舞い費用 巻1の「きたる十九日の栄耀献立」に得意先接待の有様が記述されている。(注-18) 西鶴は巻末のコメントで次の収支計算をしめている。

接待の総額	銀 350 匁	換算 ￥	400,400
接待相手への売上高	銀 15 貫		¥17,163,750
同上の売上利益高 (1 割)	銀 1 貫 500 匁		¥ 1,716,375
年間接待 2 回	銀 700 匁	￥	800,800
五節句の贈物 (100匁5回)	銀 500 匁	￥	572,000
小計	銀 1 貫 200 匁	￥	1,373,100
差引利益額	銀 300 匁	￥	343,275
売上高営業利益率			1.99%

児玉定子氏によれば売上利益高の1割は当時の商人としては過小で、少なくとも3割があるとみて採算的に不都合な接待ではないとしている。

乳母の給金 巻5の「二膳居える旅の面影」に乳母の1年間の給料が銀80匁(¥91,520)であると書かれている。(注-20) なお、井原西鶴の世間胸算用の巻3の「小判は寝姿の夢」に乳母の待遇についての記載がある。その内容は、給金は前払いで年間85匁(¥97,240)で年間4回衣服を支給ということで契約し10パーセントとの手数料を周旋屋に支払った。

大女の飯炊きが、布まで織って半期32匁(¥36,608)に比較して乳母の給金はよかったようである。(注-21) なお、三田村鳶魚氏によれば、一般的に、

通常の下女と呼ばれる人たちの給金は、寛永年間（1624－1644）で年間金1分（¥42,225）宝永年間（1704－1711）になると年間金1両から1両2分（¥64,383－¥96,574）になったという。（注-22）

- 注 18. 井原西鶴著「万の文反古」日本古典文学全集 井原西鶴集(3) 1989
小学館 p282-285
19. 児玉定子著「宮廷柳営豪商町人の食事誌」1985 築地書館 p103-108
井原西鶴著「万の文反古」前掲書 p362
21. 井原西鶴著「世間胸算用」前掲書 p450
22. 三田村鳶魚著「江戸の女」河出文庫 昭和63年 河出書房 p179

あとがき

井原西鶴が当時の作家としては珍しく商人生活の経済性をとりあげ、元禄期以後の金銭感覚を如実に示していることは貴重なものといえる。そこで小論では、とくに西鶴の晩年の作ともいえる、書簡体小説としての「万の文反古」の中から、金銭に関する記述を抜粋して現在の貨幣価格に換算して分析しようとしたものである。

今後、「日本永代蔵」や「世間胸算用」など西鶴の経済小説や、その他の作家の作品も併せて総合的に分析をし、当時の経済生活の実体を把握するための序論であることを了解して頂きたい。

図表－１ ①世帯の大事は正月仕舞

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
1	家賃 3 ヲ月分					180				205920
2	米屋支払内金	3								205965
3	医者への薬礼								500	8500
4	借入金利息					60				68640
5	小脇差売却代	3	2							240293
6	今年暮の 不足額				45					51491250
7	現在までの 利益額				439					502325750
8	借金の利息 支払総額				314	600				359980900
9	貸倒金				37					42337250
10	米の売買損				85					97261250
11	親譲りの借金				19					21740750

図表－１ ②栄花の引込所

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
12	晦日の小遣母	100								6865500
13	一年間の 小遣い(遺言)	30								2059650
14	内証の借金	4500								308947500
15	高値売・安売	1400								96117000
16	売掛金の 遣い込み	2000								137310000
17	平均年間利益	1000								68655000

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
18	放蕩の資金	9000								617895000
19	若旦那の年間 小遣い(予)	240								16477200
20	妾給金 2 人分	200								13731000

図表－３ ③百三十里の所を拾匁の無心

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
21	内職収入（茶 屋の袋張り）								8	136
22	一日の稼ぎ					1	5			1714
23	嫁入りの 持参金					800				915200
24	無心の金額					12				13728
25	同上							1		17154

図表－４ ④来る十九日の栄耀献立

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
26	商人の 振舞費用					350				400400
27	一年間の 呉服の売上				15					17163750
28	同上利益金				1	500				1716250

図表－５ ⑤縁付きまえの娘自慢

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
29	簡易な贈答品の送料								30	510
30	贅沢な贈答品の送料	1				5				74735
31	しっかりした身代				1000					1144250000
32	小商人				70					80097500
33	奉公雛の代価					270				308880
34	鹿子染の衣裳12枚					650				743600
35	手紙相手の財産				70					80097500

図表－６ ⑥京にも思うよう成事なし

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
36	仙台での生鰯(14-15)								1	17
37	京での干鰯(16-17)								1	17
38	丁百								100	1700
39	九六銭(省百)								96	1632
40	家屋敷の家賃収入					70				80080
41	後家の借金				23					26317750
42	嫁の世話料				2	300				2631700
43	持参金付の嫁				3					3432750

図表－ 7 ⑦あけて驚く書置箱

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
44	総領甚太郎 への遺産				350					400487500
45	次男甚次郎 への遺産				200					228850000
46	姉妙三 への遺産				30					34327500
47	弟甚太兵衛 への遺産				50					57212500
48	甚太夫 への遺産				20					22885000
49	手代九郎兵衛 への遺産				5					5721250
50	後家へお寺 参りの賽銭				20					22885000
51	後家へ渡す				5					5721250
52	芝居の金主 の証文				30					34327500
53	後家が貯めて いた銭							800		13723200

図表－ 8 ⑧代筆は浮世の闇

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
54	忘れた財布 の中身	183	25			60				13061605

図表－9 ⑨南部の人がみたも真言

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
55	良竜（アマリ ョウ）の価格	50								3432750
56	東福寺前の 料理屋代価						1			114
57	同上（銀1分 から2匁）					2				2288
58	一汁四菜の 即席料理代価						5			570
59	芝居への 出資金	2000								137310000

図表－10 ⑩この通と始末の書付

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
60	貸してくれな かった金額					30				34320
61	5，6年で 稼いだ金	2000								137310000

図表－11 ⑪人のしらぬ租母の埋み金

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
62	珊瑚樹を 入質借入金					300				343200
63	珊瑚樹の 購入代					700				800800
64	伊勢講仲間の 掛金借り					170				194480

No	項 目	金			銀		銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文
65	医師支払 (銀子 2 両)					8	6		9836
66	傘 8 本代 支払い					12	4		14184
67	奉行人宿支払 (銀 1 両)					4	3		4918
68	割り勘の 飲食代					2	7.5		3143
69	衣裳縫い賃					40			45760
70	月見の部屋代							1	17154
71	堀川牛蒡 20本代					7	2		8236
72	脇差の柄糸代					6			6864
73	柳風呂遊興代					230			263120
74	仏像修理代					25			28600
75	ふんどし 2 筋代金					36			41184
76	駕籠屋九市 借証文					800			915200
77	ばくちで巻上 げられた金	400							29429680
78	九市が取った てら銭				16				18308000
79	鼓の筒と脇差 受けたし	1	2						102983
80	強請にて支払	150							10298250
81	娘に家をもたす				8				9154000
82	支払雑費				6				6865500
83	ご隠居の 臍繰り	500							34327500

図表－12 ⑫広き江戸にて才覚男

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
84	寺参りの 仏の花								3	51
85	4, 5 年間の 儲け	80								5492400
86	医者への謝礼	5								343275
87	借入金 (医者の保証)	500								34327500
88	棚卸財産 (金子だけ)	9000								617895000
89	子供雇いいれ (10年間)	300								20596500
90	現在の身代	10000								686550000
91	年間倭約額	50								3432750

図表－13 ⑬二膳居る旅の面影

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
92	乳母の給金 (年間)					80				91520

図表－14 ⑭桜よし野山難儀の冬

No	項 目	金			銀			銅		円 換 算
		両	分	朱	貫	匁	分	貫	文	
93	丁稚給金 (5年)					50				57200
94	預けたお金の 引出し					200				228800